

七十年の歩み

所 理 喜 夫

昭和四年（一九二九）五月一日 ○歳

茨城県結城郡石下町大字新石下三七五ノ一で父所^{おき}・母^{おき}の長男として誕生。みち子、さだ子、つな子の三人の姉がいた。長男出生に喜んだ父は、高い柱を建て、沢山の鯉のぼりをあげたという。物ごころつきかけた頃、空を飛ぶ飛行船を見て、箒を持ち出して「取ってくしろ」と泣いたのを今でも思い出す。ツェッペリン伯号だったのだろうか。後に二男恵之助、三男雄三、四男秀雄、五男悦夫が生まれる。父は運輸業と石灰販売業を営む。祖父が小学校の校長先生だったせいか、筆は上手だったが商売は下手だった。

昭和十一年（一九三六）四月 六歳

石下町立尋常小学校入学。

昭和十七年（一九四二）三月 一二歳

石下町立国民学校初等科卒業。

担任は男子組高橋貞先生・女子組篠原せい先生。それぞれが六〇名を越えていた。狩野政直氏の論文でも取り上げられた「自由教育」の学校だったが、三年頃から軍国教育に一変する。昭和十六年十二月八日太平洋戦争に突入。早朝の「本八日未明帝国陸海軍部隊は西太平洋上において米英軍と戦争状態に入れり」の臨時ニュースに躰がガタガタ震えた。小学校

時代の私は軍艦の写真をみるとその艦種を当てることができるとかの軍国少年だったが、一友人の目には次のように写っていたらしい。

所理喜夫君 お父さんは通運関係の仕事をしていた。彼は小学生の時から本が好きだった。時にはお姉さんが読んでいた女性雑誌を読み、先生から「読書はいいが、年齢にあったものを読むように」と言われていたようだ。軍国少年などには間違ってもなるタイプではなかったと思う。子供ながらに大久保君と三人で「戦死、死にザマ」について語り合ったことがあったが当時から美意識の持ち主で、われわれが齒がたつものではなかった。

海中の一級上で金村雷神の現宮司と二級下に所姓の兄弟がいて従兄弟であることが分かった。理喜夫君とそっくりの顔だちで好感がもてた。結局、彼は歴史学者として大成したのだろう（鈴木喜十『竹馬の友雑記帳』Ⅱ私家版より）。

昭和一七年四月

茨城県立下妻中学校入学。

昭和三二年（一九四七）三月

一七歳

同 校 卒業。

同校は明治一七年（一八八四）に創立されながら、一旦は廃止、地域住民の設立運動によって同三〇年に設立された伝統校。赴任以来勤続の垂野・緑川・篠原先生などの名物先生がいた。千代川村村長の永瀬純一先生、母校の百年史『爲桜百年史』の執筆・監修に鞭打って下さった中村貞夫先生は、中学生の時から恩師である。中村先生は大学時代には地方史研究協議会初代会長野村兼太郎先生のゼミ「ノムケンゼミ」をとった。また後に永瀬先生の御子息・衛君が私のゼミをとり、近世史研究会のチーフとなったのも「縁」だったのであろう。昭和十七年から戦局悪化し中学三年時に結城市の「日本気化器工場」に学徒動員。そこでの仕事もなく、やがて筑波郡吉沼の陸軍飛行場に配属。同二〇年に入ると同飛行場もF6FやP51の空襲を受けるようになり、また石下町上空で、特攻隊機がB29の編隊に突入、体当りした白煙を、遠く高

く目撃した。同年陸軍士官学校予科に合格。本土決戦を期し大量に採用したらしく、空は八月、地上は一〇月の二期に分けて入校予定だった。将校生徒というよりも、もはや特攻隊要員だった。私は一〇月入校予定。もし入校していたら二期上に田中彰君がいた。同年八月一五日敗戦。泣くほど悔しかったが、敵機の轟音もピタリと止まり、ホッとした。

昭和二三年（一九四八）四月 一八歳

東京高等師範学校文科二部国文学科入学。

昭和二五年（一九五〇）五月 二一歳

東京教育大学文学部日本史学二年編入学。

昭和二八年（一九五三）三月 二三歳

同学 同学部 卒業。

一浪して国文を選んだのは、中学時代から本を読むのが好きで、国語の成績が良かったからである。高師に入って上京。一時は石下から通学したり、幼馴染の大久保昌君と金町の幼稚園に間借りしたりしたが、二年次より板橋区常盤台の桐花寮に入寮。寮監として体育の大滝先生・桜井徳太郎先生。自治会組織の幹事長として芳賀登大兄、堀口貞幸君がいた。大学の日本史専攻のクラスは十三名。同期は、田中彰、鳥井太、中蘭崇君など。担任は木代修一先生。

昭和二八年（一九五三）四月一日

東京教育大学大学院文学研究科日本史学入学。

昭和三〇年（一九五五）三月 二五歳

同学大学院修士課程卒業。五月一日からは私立桐朋学園高等学校教諭。

昭和三一年（一九五六）一〇月一日 二七歳

都立城北高等学校赤羽分校（赤羽商業高等学校）教諭。私立の名門校から都立の定時制に転じたのは父が三〇年春に没し

たため、自活しながら博士課程に進学したかったからである。同校にはそのような教師が多く、ここで山本茂・飯岡透さん等の友を得た。後に山本さんは公認会計士、飯岡さんは本学経済学部教授となった。

昭和三十九年（一九六四）五月二十八日 三五歳

工藤又吉と工藤ちうの三女・英子と結婚。新居を豊島区西巢鴨二丁目六四八番地に営む。広さは二Kの都営住宅。後駒沢大学に転じてから度々学生諸君が遊びに来た。

昭和四十一年（一九六六）五月一日 三七歳

長男理英誕生。

昭和四十二年（一九六七）七月 三八歳

関東学院大学経済学部非常勤講師。教職日本史の講座で集中講義。

昭和四十三年（一九六八）四月一日 三九歳

横浜国立大学教育学部非常勤講師。講座は日本史学特講。任期は二年。宮城・水戸部両先生の御厚直を得た。この後も一・二度、同学に出講した。宮島敬一君はこの時の教え子。

昭和四十三年四月二五日

長女暁子誕生。

昭和四十四年（一九六九）一〇月 四〇歳

地方史研究協議会常任委員。会長は児玉幸多先生、事務局担当・俗称幹事長は高島緑雄さん。

昭和四十五年（一九七〇）四月一日 四〇歳

駒沢大学に採用。同学文学部歴史学科専任講師。

昭和四七年（一九七二）四月一日 四二歳

同学 同学部 助教授。

昭和四八年（一九七三）一〇月 四四歳

地方史研究協議会の事務局を担当。

昭和五十二年（一九七七）三月二三日 四七歳

文学博士の学位（東京教育大学）を取得。主査は津田秀夫先生。津田先生は木代先生の教え子。当時教育大学は廃学寸前。今更ながら先生の御努力に感謝する。

昭和五三年（一九七八）四月一日 四八歳

同学部 同学科 教授。

この八年間はいわば花の助教授時代だった。とくに任期は二年だが地方史の幹事長は激職だった。葉貫磨哉さんには常任委員として御助言をいただき、また橋詰茂・有元修一・久保田昌希・宮本（旧姓山城）由紀子の四君は、ほとんど無報酬で書記を勤め、また廣瀬良弘君や学生諸君も大会や日常の会務を献身的に尽くした。織田信長研究会が滋賀県安治に、近世史研究会が愛知県東栄町と新城市に、戦国史研究会が静岡県三ヶ日に、研究の拠点を固めたのはこの頃だった。

同年七月 四九歳

日本歴史学協会委員。

昭和五四年（一九七九）二月一日

文部省学術審議会専門委員（科学研究費分科会）。任期は五六年一月二二日まで。

昭和五六年（一九八一）七月 五二歳

日本歴史学協会常任委員、同協会「国立公文書館特別委員会」委員長。この年四月、茨城県史編集委員会近世第二部会幹

事、一〇月には地方史研究協議会常任委員を辞し、埼玉県委員となる。

昭和五九年（一九八四）七月 五五歳

日本歴史学協会常任委員に再選、同会「国立史料館特別委員会」委員長。

昭和六〇年（一九八五）四月 五四歳

駒沢大学文学部歴史学科主任。二年後に再任。

昭和六四年（一九八九）一月一日 五九歳

足立区立郷土博物館館長。杉山博さんの跡を継いだもの。杉山さんは私の地方史の先学であり恩師で、同僚で親友だった。前年に亡くなられた。

平成元年（一九八九）四月一日 五九歳

駒沢大学文学部長、同学理事を兼任し、同三年四月、文学部長に再任。また同元年二月一日文部省学術審議会専門委員に再任。

平成三年（一九九一）七月二二日 六二歳

第一五期日本学術会議会員。

平成六年（一九九四）七月 六五歳

第一六期日本学術会議会員、歴史学研究連絡委員会幹事、第五常置委員会幹事。

平成七年（一九九五）四月一日

駒沢大学大学院人文科学研究科日本史学専攻主任。

平成八年（一九九六）四月一日 六六歳

駒沢大学図書館長。任期は同一〇年三月三十一日まで。

平成九年（一九九七）七月

六八歳

日本学術会議第七期会員、第五常置委員会委員長。

平成一二年（二〇〇〇）三月三十一日 七〇歳

駒沢大学を停年退職。

本学に職を奉じてはや三〇年、まっ黒だった頭も白頭と化した。中学一年で初めて漢文を習い、「少年老い易く、学成り難し」などと素読させられたのも昨日のような感じがする。かつて私たちとともに駒沢史学会と地方史研究協議会の会務を荷ってくれた若い研究者の卵たちも、一流の研究者に育ち、また社会の中核として活躍している。二一世紀の日本の社会と本学は、彼らによって荷われる。本学においても私は「良き師・良き友」を得た。その人々に感謝し、明るい本学の未来を祈念しつつ、私は本学を去る。